∞∞∞

人格の中心に魂が触れるように努めること、それがわれわれの義務なのだ。」
　この考え方はシシリーにとって新しいものではなかった。だが、その理論が実践されているのを見るのは喜びであった。さらに、彼女が新鮮な驚きを感じたのはスタッフの薬の使い方だった。以前働いていた病院では、治癒し得ない状態であることがわかっているのに、無益な手術と治療が続けられていた。ところが、ここに来て初めて精神的にも肉体的にも痛みから解放されている患者を彼女は見た。その秘訣は、痛みが襲ってくる前に定期的に鎮痛剤を与えることだった。また注射ではなくできるだけ口から与えていた。なぜなら、患者にとってもその方が楽だし家庭でもできるからだ。このいかにも単純な方法が、やがてシシリーの鎮痛剤の用い方の基礎になった。さらに、これが今日の鎮痛剤使用の 5 原則(WHO 方式)の礎石にもなったのである。

　末期患者のそばにいたいという彼女の願いは弱まることはなかった。「死にゆく人たちの問題が、ますます私の心を占領してくる。とくにがんが進んでしまって、希望が持てない人たちのことが気になる。あの人たちが医者に見放されてしまったと感じるのは、ある程度当然のような気がする。彼らの苦痛をやわらげることは不可能なのだろうか。そういう道を私はなんとか見つけだしたい。それを実現するただひとつの方法は私が医者になることだ。」難関を突破し、1957 年 4 月彼女は医師となった。もう 39 歳が近づいていた。

　1959 年、遂に行動の時が来た。その先どう動けばいいのか確実なことはわからないながらも、やるべく仕事を信じ行動に出た。医療的、組織的、財政的問題を解決するために、「要望書」と「概要書」を各界の指導者に送った。市民にもサインや援助を求め、多くの有志や善意ある人々から、多額の支援を得ることに成功する。要望書の一部、紹介する。
　「人々の多くができるだけ長く家で暮らせるというのは大切なことであり、また大多数の家庭が状況をうまくやり繰りできることも事実であるが、技術を備えた施設での世話が必要になったときにも家にとどまらざるをえない人が多いこと、そして主な理由の一つが適切な施設が足りないことにあるのは明らかだ。」
　1967 年 6 月、ついに最初の住人がロンドン郊外の住宅街の一画に建てられた聖クリストファー・ホスピスへ到着した。病室には広々としたバルコニーがつき、至るところに植物や花が置かれ、大きな窓からあたたかな陽ざしがさし込む。道行く人の話し声や子どもたちの笑い声が病室にも快く響いてくる。死を迎える場所であるだけでなく生きる場所でもある。コミュニティの中にある小宇宙なのだ。デヴィット・タマスと出会い、計画した時から約 20 年の月日が経っていた。
　シシリー先生が大切にしていた言葉は、『”Be there”（共にある）』であったという。私も、患者様ともご家族様とも、地元の人とも、”Be there”。これを胸にしまって、明日から医療を提供していきたい。

理事　井上　林太郎